は一二年秋、東京医学校を卒業するや、当時としては破格の月給一〇〇円で招かれ、病院長兼学校長として赴任してきた。だが、どちらも大きな赤字を出したため県費でこれを補助してきたが、ついに二一年医学校、つづいて翌二二年に公立病院も閉鎖。このため、博士はこの病院を借り受け、私立大分病院として引き継いだ。

この間、公立病院で治療を受けた患者数は二万八一六〇人（年平均二八一六人）、また医学校でも七五人の医師を養成している（『大分県統計書』）。

この後、県立病院は三二年七月に再開。同博士は私立大分病院を県に返還。私立朝見病院は、この時つくったものであり、当時としては全国でも珍しく医師五人、看護婦三五人を擁する大病院であった。のち、この病院を買収する話が県議会で出たおり、「かってベルッ博士（注、日本の医療制度の確立に貢献した来日中のドイツ医師）も大いに賞賛した所なり」と紹介されたほどであった。だが、県の財政上、買収はついに実現しなかった。

紙数の制限から概要のみ述べたが、詳細を知りたい方は『大分県史』近代編Ⅰ（通算第一六巻、昭和五九年刊行）と、大分大学（教育）研究紀要（昭和六〇、六一年刊行）の拙稿「明治初期における大分県の法政事情上下」を参照していただきたい。（つづく）

内竈の古墳と観音堂―手嶋家墓所

相良範子

祖母、母、私とで毎年おこなった墓所の墓掃除について思い出を書きましょう。

私が女学生のころのことです。草をとりながら、「おばあちゃん、なぜこの山には杉やひの木を植えないの。木が大きくなったら家が建つのに」と申したことがありました。すると母は、

「何を言うかえ、この山にしいの木や椿の木があるのには、わけがあるのよ。昔天明の大飢饉の時、このしいの木があったおかげで、みんなの家にしいの実を三升五升と配ることができたのです。それで五ケ村に餓死者がひ

とりもでなかったのですよ。」

また、椿の木は、日出から嫁に来た大祖母が、常々申していたそうですが、日出の木下藩では必ず生垣に植えて、それから油を絞って食用にしたり、かたしの実をくだいて髪を洗ったというのです。

それから最近のことですが、私がお墓の草をとっていましたら、細いがしっかりした珍しい竹がありました。手伝って下さっていた伊東明さんに、

「おじさん、この竹は珍しいですね。お祭の行列の毛槍のように先に葉があって、節の間が1メートル以上もありますね」と言いましたら、伊東さんは、

「先生それは、むかし高張りちょうちんの骨にしていたのですよ。この山から切り出して大阪の蔵屋に、船で運んでいたのです」と言われました。

一木一草、それぞれ生かして使った昔の人の生活の知恵に驚きました。

また、母は、「ここのお墓は、元寇の時博多で討死にされたお殿様のお墓なのですよ。子孫は、その後、別府が天領時代に、代々弁差として地域の皆様のお世話をつとめた家柄だったのです。善政をしいたので大々祖父の時には、『九右衛門星があがる』といって供養踊りが立ったり、娘は、代官家に嫁いだりしていたということなのです」とよく話してくれました。

現在は、後裔であります私の所有になっております。

この手嶋家墓所について、昭和一五年に十時英司先生の興味ある論文がありますので、その大意を紹介いたしたいと思います。

別府市内竈に歴史考古学上から見て、相当価値のある観音堂と古墳がある。

内竈は古いところである。もと竈門荘に属し、国志によれば「竈門荘は内竈、小浦、小坂、古市、里屋（旧亀川）の五村の総称である。併し、その以前竈門は朝見郷の一部であり荘名を以て呼ばれ、早く宇佐弥勒寺領となりし為ならん」、豊後国図田帳に「竈門荘八十町、宇佐弥勒寺本荘五十三町、地頭職竈門次郎貞継」と見えるともある。

明治以後は、小浦、小坂は平道となり豊岡町に入り、

亀川は平田と合して亀川と称し、また、古市、内竈を合して内竈と称し、さらに、亀川、内竈、野田をあわせて御越町（後亀川町）となった。

以上が竈門荘の略沿革であるが、竈門の名は随分古く、風土記にも「速見郡西竈門山」とあり、名の意味は、付近に赤湯地獄があって湯の煙たえず、地形もまた竈に似ていることから起こった。古今六帖に「京都より西にありてふ竈門山、煙絶えせぬ恋もするかな」、亀山随筆に「竈門山は赤湯山に隣て、共に温泉ある所なれば、山煙常に絶えることなし、故に竈門とおわせたりと聞こゆ」とあるによっても証せられる。

手嶋家墓地丘陵　竈門神社裏参道より

さて、亀川町の八幡竈門神社と国立別府病院の間を通り山手の方に進むと、やがて内竈の雄大な景観が展開する。一連の山脈が左右に弧を描き、鶴翼のように張ったその中央の要所に一台地が突き出している。

この台地が三段の構えになり、最高所が本題にいう古墳で、中段が観音堂、下段が両者の地主手嶋渉氏宅である。手嶋氏の邸は亀川の町から海上まで一目で見下ろされる景勝の地である。ただの民家ではなかったことを地形が雄弁に物語っている。

観音堂は、瓦葺きで、二間西面の小堂、古墳の南部を剃り落としてこしらえた平地の上に建てられている。

堂内正面に十一面観音菩薩の木像、向かって左は多門天（毘沙門天）、向かって右は不動明王、一段低いところの左右につくねたような土人形がある。

観音堂左の平地一坪ばかりには五輪塔が雑然と重なり、石の観音像や俗人の板碑型の浮彫像が一つある。

堂内の十一面観音像は、台座九寸、像高二尺一寸、木造立像で頭はかん入になり、随分立派なものらしいが、何分粗悪な絵具で、少なくとも二回以上の修補彩色を行

ない、スッカリ台無しになっている。尊容は豊麗で姿態も整い、褶襞（ひだ）なども古式であるが、最早芸術的価値はないと思う。しかし、信仰の対象としては、地方の人々の崇敬も厚く、また、古来幾多の霊験談もあるのである。

問題は観音像の左右に多門天（毘沙門天）と不動明王の安置されていることである。小野玄妙博士によれば、（博士は石仏についていったのであるが）これは、宇佐の八幡大菩薩信仰と密接な関係がある。不動明王、毘沙門天の二尊を並べ奉祠する例は、後世この宇佐八幡を勧請して建てた東大寺の手向山八幡や石清水の男山八幡の末社にまでおよんでいるというのである。

そうして、豊後の石仏は旧宇佐神宮領内に多く存在し且つ、造顕者に関する伝説が日羅、蓮城、仁聞等のおそらく支那、朝鮮より来住した帰化僧の手に成るものと伝えられる点から、

一　宇佐八幡と密接な関係がある。

二　石仏造顕は、六師将来の東台両密以前の古密教の信仰に基づく

三　豊後石仏は、中唐の開元天保の様式を伝えたるもの、従って奈良朝頃の作ならん

と結論づけている。

この様式は、豊後では、石仏だけでなく、当地方信仰の対象である伽藍内安置の本尊にも見られる。

観音堂のこの様式は、それが宇佐神宮領であることを思い合わせると、独特の形式を襲用していることは興味深い。すぐ付近にある八幡竈門神社は、宇佐八幡を勧請したものであるから、この二尊併置は直接には八幡竈門神社との関係があるといわねばならない。

いま一つ観音堂が八幡信仰と関係のあるのは、二尊より一段低いところの左右にある、一寸目には変てこな土人形である。

この土人形は、昔から手を触れると腹が痛くなるという伝承がある。壁土のような塑泥で作った達磨の恰好をした人形で、表面には紙が張ってあり、高さ八寸くらいの座像である。古拙で幼稚な手法であるが、眉目はハッキリうかがはれる。これは、奈多八幡などの僧形八幡の神像とよく似ているのである。そうだとすれば、この土

人形も八幡竈門神社と関係があり、ひいては宇佐八幡とも因縁あるものと思われる。観音像は仁聞作と伝えられるが、この伝説は、むしろこの土人形にあるべきであろう。

五輪塔群の中に、一つ形の完全なものがある。高さ六尺三寸五分の堂々たるものである。塔身は国東塔のようで、はっきりしないが、阿閦、宝生、弥陀、不空成就の金剛界四仏の種子のようである。

これに関連して、塔のすぐ右に「四国三十三所」の台座があり、その上に石質の異なる「地蔵様」とか「観音様」といわれる高さ一尺ばかりの石像が立っている。この像は、実は「大日如来」ではないだろうか。もとは、観音堂の真ん中に安置され、左右の脇侍に毘沙門天と不動が配されていたのではないだろうか。三つに折れたものをソッと重ねているが、姿がスッキリして実に立派な像である。

この像のすぐ右に俗人を刻んだと思われる板碑状の石像がある。深田石仏の真野の長者像をほうふつさせるが、おそらく、観音堂創設者の手嶋家先祖の像として顕造したものと想像できる。

次に、最上段の古墳についてみると、これは、自然の丘を補修した丸塚である。手嶋家の伝承では、鎌と斧を持って踏み込むべからざる所とされていた。そのためか、先祖以来不入の霊域とされ雑木が茂り、余りにも荒れていたので近年手入れをしたところ、はしなくも葺き石を発見した。

丸い塚の表面には、拳大の川原石で経一尺一寸くらいの輪を造り、この輪型が亀の甲のように或は丸い餅でも並べたように十数個置かれている。この輪の崩れた所をみると、一層下からやはり拳大の川原石が露出している。おそらく、丸塚の上を石で葺いてあったが、後に土をかぶせて石を隠し、さらにその上に川原石で何らかの信仰を現わす石の輪を文様のようにこさえたのであろう。これは手嶋家先祖の古墳で、表面を葺き石で覆う古式のものであろう。

後世に子孫が、古墳の南部を削りならして仏堂を建て（おそらく大日如来、毘沙門天、不動明王の三尊）を祀り、あわせて板碑型石像を刻んだのであろう。さらに、

子孫が観音信仰にはいり、大日如来を観世音に置き換え、古墳にもその信仰を表現して輪型を加えたのであろう。

内竈は古い所である。図田帳にある竈門次郎貞継よりも古い先祖の墓であろう。奈良朝あるいはそれ以前のものかも知れない。

第三段目にある手嶋家は、累代この地に屋敷を構える旧家で、邸前に展開する河を挟む一帯の田地を家産として継承している。古墳は同家の墳墓の地であり、内竈門共同の先祖墓として崇敬すべきものである。

同家は十代前火災のため系図、古文書一切を焼失し、先祖をたどるなにものも存在しないのは惜しいことである。

何分にもこの論文が出てから約五〇年経ている。考古学上からもさらにメスを入れるべく、識者に依頼して保存に注意している。

手嶋家は、代々九右衛門某を名乗り、四代前の九右衛門禎蔵は天領地であるが、苗字帯刀を許されて、娘などは高松代官に嫁ぎ、供を連れて高崎越えをする時は、振り向かない者がなかったほど美しい人であったという。

別府の鏝絵（こて）

藤田洋三

鏝絵　村や町を散策しながら家々の「造り」を観察してみると、「オヤッ」と驚かされる庶民の芸術を発見する事がある。「鏝絵」もその一つである。鏝絵が描かれているのは、主に雨戸を収納する戸袋や、土蔵の入口の上の牛木の附近とその反対側、商家の正面上の入口の大壁、農家の馬屋の正面上部の大壁などが多い。

図がら（意匠）も、妻壁に「水」と書いて「火事除け」の祈念をしたもの。水の渦を意匠化した巴紋も見られる。「富貴」を祈願する意匠は「七福神」が一般的であるが、大黒天、恵比寿神の意匠が最も多く、福禄寿や布袋和尚は、大分県全域でも数件みられるのみで、他の毘沙門天、弁財天女、寿老人などは、一件も見かけない